

だれも知らない何かを求めて

北川 香子

1965年生まれ。愛知県立千種高等学校および東京大学文学部、同大学院卒。2019年より学習院女子大学国際文化交流学部国際コミュニケーション学科教授。博士(文学)。専門はポスト・アンコール時代カンボジア史。

カンボジアという国は、東南アジアのなかではもっとも古くさかのぼることができる歴史をもつ国です。カンボジアのナショナリズムはこの歴史を誇りとし、国旗にデザインされているアンコール・ワットがその象徴となっています。カンボジア研究の主流はアンコール遺跡群で、ポスト・アンコール時代は衰退期であって魅力的ではないと思われてきたため、研究する人は世界でも極少数です。

昭和後期の子どもの目にみえていた世界

私が子どもの頃に認識していた世界情勢は、日本では戦争が終わって20年以上が経ち、自分たちは親世代が小学生だった頃とは天国と地獄ほども違う豊かで呑気な生活を送っている一方、世界各地では悲惨な戦争が続いていて、自分を取り巻く平穏も薄紙一枚に包まれた一時的で危ういものに過ぎないのかもしれない、いずれ資源が枯渇して、自分も飢えや欠乏に悩まされるときが来るのだろう、というものでした。1999年に人類が滅亡するという「ノストラダムスの予

言」を本気で信じている同級生も大勢いました。

ベトナム戦争は物心ついたときからのいわば常態で、中東戦争もそれに近い認識でしたが、1973年に始まる第4次中東戦争は、オイルショックにともなう買い占め騒動とともに強く記憶に残っていますし、79年に始まるアフガン侵攻は、自分と同年代の少年兵の映像をみたときのやるせない感覚を覚えています。一方1972年の沖縄返還は、校長先生のお話があったことを覚えています。同年の日中国交正常化についてのお話の記憶はなく、東京の上野動物園へのパンダ来日も、自分が直接みることのない、海外同様に遠いどこかのできごとという感覚でした。

現在の私が専門としているカンボジアについても、テレビやラジオのニュースで耳にすることがありました。ポル・ポト政権下(1975～79年)のできごとをはじめてまとまった話として読んだのは、1983～84年に『暮らしの手帖』に連載された田辺聖子さんの「カンボジアに何が起きたか」です。自分が実際に頭をなぐられたように、キナ臭いような鉄臭いような匂いを鼻の奥に感じ、その世界のなかで生きのびていこうとする人々のことを思うと、絶望的な気持ちになりました。

史料がない、現地に行けない

ポスト・アンコール史を研究対象とした動機

は、このようなカンボジアの近現代史とはまったく関係のない、「まだだれも知らないような新しいこと」をやりたいからという、非常に子どもっぽいものです。1980年代の日本でカンボジア史を専門に研究していたのは、上智大学の石澤良昭先生だけでした。東京大学文学部東洋史学科の大先輩に金山好男さんという方がおられましたが、私が生まれる前にフランスで亡くなっていました。幸運なことに私が4年生のとき、石澤先生が東大の東洋史学特殊講義をご担当され、その後も上智大学の先生の研究室にたびたびおうかがいして、ご指導をいただけるようになりました。一方東大の指導教官の先生は、とても哀しいことに、私たちが3年生で進学した直後に体調を崩され、4年生の時に亡くなってしまいました。指導教官をなくした私たち東南アジア史のゼミ生は、南アジア史、中国史、西アジア史の先生方の指導を受けることとなりました。そのような環境のなかで、東南アジアの文化は南アジア、東アジア、西アジアと共通する要素をもっている、でも、インドや中国や西アジアとは決定的に何かが違う、という感覚を抱くようになりました。

当時、日本国内に所蔵されている東南アジアの史料はあまり多くなく、とくにカンボジアとラオスの史料や書籍は皆無に近い状況でした。ラオスより少しだけ研究に有利なことに、カンボジアに関しては旅行記のほかに、碑文や年代記のフランス語訳がありました。私の卒業論文は2部構成で、第1部では年代記諸本とベトナム、日本やヨーロッパの史料とを比較して、年代記の記述の何がほかの史料で裏づけられるのかを確認し、ポスト・アンコール通史を作成しました。これはその後の私の研究の基礎となっています。第2部ではポスト・アンコール時代の碑文と法典を史料に、人々の名前に付された称号を分析し、身分や階級の構造を明らかにしようと思いました。修士論文では、19世紀中葉のヨーロッパ人の旅行記を読んでいて発見した、

当時の王アン・ドゥオンが構築した域内交通路網について研究しました。同王が建設した陸路網は、現在の国道の原型となっています。とくに王都ウドンと「王の港」コムポートを結ぶ「王の道」は、メコン河口がベトナムの支配下に入って「陸封」されたカンボジアにとって、もっとも重要な交通路でした。現在のカンボジアでも、近代港シハヌーク・ヴィルと国道4号線および鉄道が、「王の港」と「王の道」の役割を担っています。カンボジア王国憲法の規定によると、王位につけるのは同王の子孫ということになっています。つまり現在のカンボジア国家の骨格となる部分は、フランス保護国時代ではなく、それ以前のアン・ドゥオン治世までに構築されていたのです。これは当時としてはまったく新しい認識でした。

カンボジア留学

1980年代後半になると海外に旅行する大学生の数が一気に増えていきましたが、ベトナム、カンボジア、ラオスのインドシナ3国は、まだまだ簡単に旅行できる場所ではありませんでした。その後1991年のパリ和平協定にもとづき、92年に国連カンボジア暫定統治機構(UNTAC)が設立されると、一気にカンボジア情勢が動きました。日本人の明石康さんがUNTACの特別代表になったこと、平和維持活動(PKO)に自衛隊がはじめて派遣されたこともあって、日本国内では連日カンボジア情勢が報道されました。そしてついに93年度から、カンボジアとラオスが文部省(当時)の「アジア諸国等派遣留学生制度」の対象国に加わりました。ベトナムが加えられたのはその前年度だったと思います。

私は最初のカンボジア派遣留学生として、93年度の採用試験に合格しました。この年のカンボジアではクメール・ルージュが総選挙を拒否して戦闘を継続し、日本人でも国連ボランティアの中田厚仁さん、文民警察官の高田晴行さんが命を落とされました。まだ東京のカンボジア

大使館は開かれていませんでした。そのため手続きに時間がかかり、カンボジア入国は年度末ぎりぎりの94年3月となりました。プノンペン大学史学科に所属したのですが、当時のカンボジアは復興支援ブームで、外国語ができる大学教員は通訳業務などにかり出され、授業はほとんどおこなわれませんでした。地方ではクメール・ルージュと政府軍の戦闘が続き、94年にはコムポート地方で列車が襲撃され、欧米人旅行者3人を含む大勢の人々が殺される事件もありました。プノンペン市内でも強盗や銃撃戦が頻発しており、プノンペン芸術大学の女子学生が強盗に殺される事件もありました。男子大学生でも日没後は外出しないのが当たり前で、停電は毎日でした。それでも大勢のカンボジア人が旅行するお正月などの機会には、友人の家族とともに地方を訪れることもできました。とくにポスト・アンコール時代最初の王都がおかれたスレイ・サントーの元郡長一族と知り合えたことは、私の研究にとって大きな財産となりました。何よりも現地を実際にみたことで、今までとはまったく違う視点から文献史料の記述を解釈できるようになりました。16世紀の王都ロンヴェークと、シャムの侵略でロンヴェークが陥落したあと、17～19世紀に王都がおかれたウドンが、実は湿地帯を隔てて隣接する位置にあり、真南にある聖山を共有する1つの区域であったことも、実際に現地を訪れてはじめて知ったことです。

帰国後も年に数回カンボジアを訪れて、スレイ・サントー、コムポート、ロンヴェーク＝ウドンとその後背地にあたるポーサット地方などで口承伝承の聞き取り調査をおこないました。カンボジアの平和がいつまで続くのか不安で焦っていたからです。実際に1997年には人民党とフンシンベック党の武力衝突が発生しました。現地調査を重ねるなかで、なぜ16世紀以降の王都はメコン沿岸のどこかではなく、トンレー・サープ南岸のロンヴェーク＝ウドン地域にお

かれたのか、という疑問が生じてきました。そして年代記を見直してみると、メコン東岸に位置するスレイ・サントーは、ポスト・アンコール最初の王都として以外にも、篡奪者の都として、たびたび記述に現れてくることに気づきました。年代記の編纂目的はロンヴェーク＝ウドンの王たちの歴史すなわち正統性を示すことですから、そのなかで篡奪者と表現されているものは、彼らに対抗するライバル勢力であった可能性が考えられます。事実、日本の史料『華夷変態』をみると、長崎に来航した唐船の乗組員から聞き取った情報に、17世紀後半のロンヴェーク＝ウドンの王を「山王」、スレイ・サントーの王を「水王」と表現しているものもあります。これはシャムの領域につながるトンレー・サープ南岸陸路の出口に位置するロンヴェーク＝ウドンと、上流はラオス、河口は南シナ海につながるメコン河岸に位置するスレイ・サントーを象徴しているのではないのでしょうか。カンボジアの水と山(陸)の対称性は、プレ・アンコール時代にもみられます。また20世紀末当時のプノンペン政権とクメール・ルージュの対立構造のなかにもみて取れそうです。2023年に引退した前首相フン・セン氏が、自身をメコン東岸の王コーンになぞらえたこともありました。年代記のコーン王はロンヴェーク王都の建設者チャンリエチエ王に対抗し、滅ぼされる王位篡奪者ですが、現在もスレイ・サントー地域で語られている伝承のなかでは「昔々この地を統べた王」であり、もちろん篡奪者などではありません。

プノンペン国立公文書館

プノンペンのランドマークであるワット・ブノム(山の寺院)の西に、国立図書館があります。その裏手(北側)に小さくて可愛らしい国立公文書館の建物があり、私の留学期間終了とほぼ同時期に、一般公開されるようになりました。国立公文書館所蔵文書でもっとも古いものは、保護国時代の文書群(RSC)です。大半はフランス

語で書かれています。クメール語(カンボジア語)で書かれたものも数多くあります。そしてカンボジア史に名前が出てこない人々、つまり政治的中枢にはいなかった一般の人々が残した文書が沢山あります。ところが通史のなかには、保護国時代のカンボジア現地社会は「文字使用以前の社会」だなどと堂々と書いているものもあります。この文書群自体が、そのような歴史観に対する反証です。

まずは公教育制度の導入。通説に反してカンボジア人の就学意欲は高く、教育の普及をはばんでいたのは施設の不足だったことがわかりました。そして反仏反乱。カンボジア人は従順で、フランスによる植民地化は「衝突なく」進んだといわれてきましたが、1880年代前半にカンボジア全土で反仏反乱が発生しています。書記通訳官や地方知事など中下級のカンボジア人官吏。彼らの存在なしに植民地行政はまわりません。女性、力あるマイノリティであるムスリムの人々や中国からの移民。いずれも従来の研究では等閑視されてきました。私のもっとも新しい研究は、101年前の関東大震災犠牲者に義捐金を寄付したカンボジアの人々の名簿についてです。カンボジアは日本から一方的に援助されるだけの存在ではなかったのです。

17～18世紀の友好の書簡

日本の史料も重要です。日本には世界最古のアンコール・ワットの絵図面、『祇園精舎図』があります。そして今から11年前、2013年11月に東京大学史料編纂所が開催した史料展覧会『東アジアと日本 世界と日本』の図録準備作業中に、史料編纂所が所蔵する『近藤重蔵関係資料』に含まれるクメール語書簡が、現時点において、碑文以外で最古のクメール語文書であることがわかりました。蝦夷地探検で有名な近藤重蔵が編纂し、1797年の奥付が付された『外国関係書簡』には、カンボジアから送られた漢文書簡とクメール語書簡の写し^レが計6組含まれ

ています。1603～06年が5組、1742年が1組です。17世紀の書簡はカンボジア王と徳川家康の往復書簡で、18世紀の書簡は当時タイ湾岸に存在した華人の半独立港市国家ハーティエンの2代目支配者鄭^{まくてんし}天賜からのものです。17世紀の書簡は文字の崩れが激しく、一部分しか読み取ることができませんが、18世紀の書簡は完璧に写し取られており、全文を解読することができます。クメール語書簡の内容は、国の支配者どうしが対等の立場で書簡と贈物を取り交わし、メートレイ(友好)を確認するというものです。日本からの贈物である「刀20振」、「ヤイエモン(弥二右衛門)」など日本人商人の名前、カンボジアからの贈物である皮や砂糖、クジャクの羽などの語も、はっきりと読み取ることができます。朱印状を示すと考えられる「王の印」、「王の書簡」などの語も出てきます。これは日本史や日本とカンボジアの交流史にとって重要な史料であるばかりでなく、前近代の東南アジア諸国の主体的な外交のやり方や対外認識、世界観を解明するための貴重な史料となります。

21世紀のための東南アジア史

20世紀後半以降、現地語を用いた東南アジア研究は急速に発展し、研究者の東南アジア観は大きく変化しました。そして近年東南アジアから来日する人の数が急増しています。私の大学にも東南アジアからの留学生が何人もいます。残念なことに、東南アジアの歴史を学んだことがある人は、日本では依然として少数派のようです。世界史の教科書のなかではぶつ切りになっていますし、授業をせずに飛ばしてしまうこともあるようです。東南アジアは日本史と同じくらい、いえそれ以上に深く長い歴史をもった地域です。そしてこれからの日本にとってはますます交流が深まっていく、政治や経済のうえでも重要な地域です。東南アジアの歴史に関心をもつ方が増えることを切望しています。

(きたがわ・たかこ／学習院女子大学国際文化交流学部教授)